

9. 不登校意識に関連する要因

(1) 不登校意識群の QOL 得点

今の学年になって学校に行きたくないと思うことが「いつもある」、「ときどきある」と答えた子どもたちを「不登校意識群」とし、「ぜんぜんない」、「ほとんどない」、「あまりない」、「たまにある」を「一般群」とした。この2群は、心身の健康度・満足度（QOL尺度）の観点からみると、どのような違いがあるのか、その得点を比較してみた。

図 9-1-1、図 9-1-2 のように、小5、中2ともに、「不登校意識群」は、「一般群」に比べて、QOL 得点及び全ての領域得点の平均値が低かった。＜身体的健康＞でも、＜情緒的 Well-being＞でも、＜自尊感情＞においても、＜家族＞、＜友達＞、＜学校＞においても、健康度・満足度が低くなっていることがわかる。「不登校意識群」は、これまでみてきた、「11時半以降就寝群」（小5）、「睡眠7時間未満群」（中2）、「朝食をほとんど食べない群」（中2）、「忙しい群」（中2）、「聞いてもらえない群」、「家族で付き合いのある近所の人がない群」に比べても、QOL 得点及びほとんどの領域得点の平均値が低かった。とくに中2の＜自尊感情＞の得点は最も低くなっている。学校へ行きたくないことが「いつもある」、「ときどきある」子どもたちの心身の健康度・満足度はよくないということである。

図 9-1-1 「不登校意識群」の QOL 得点と 6 領域得点の平均値（小5）

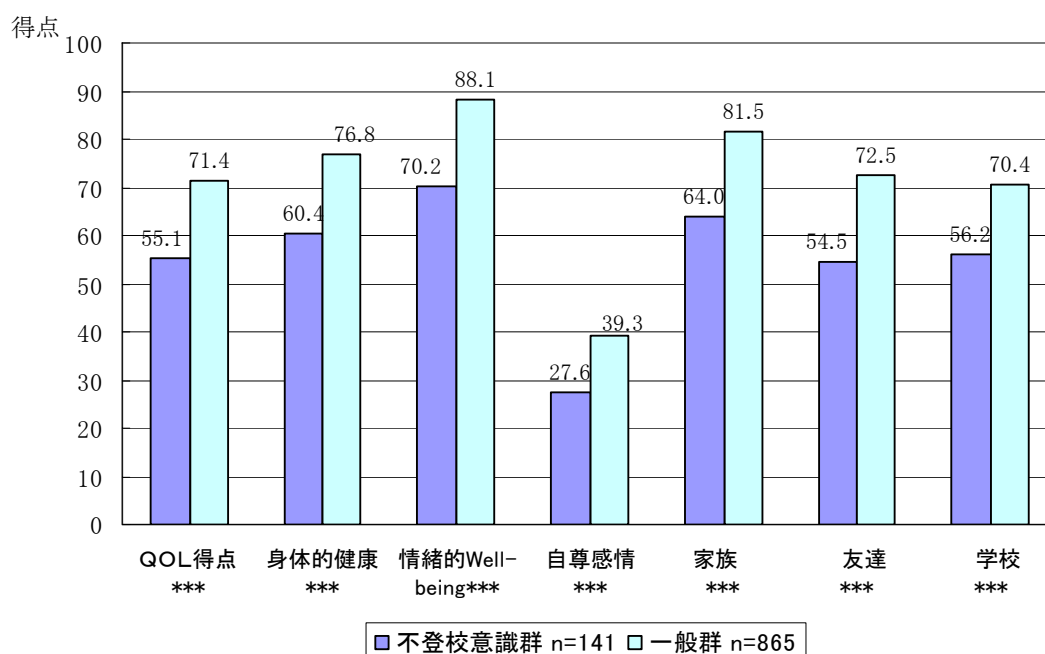
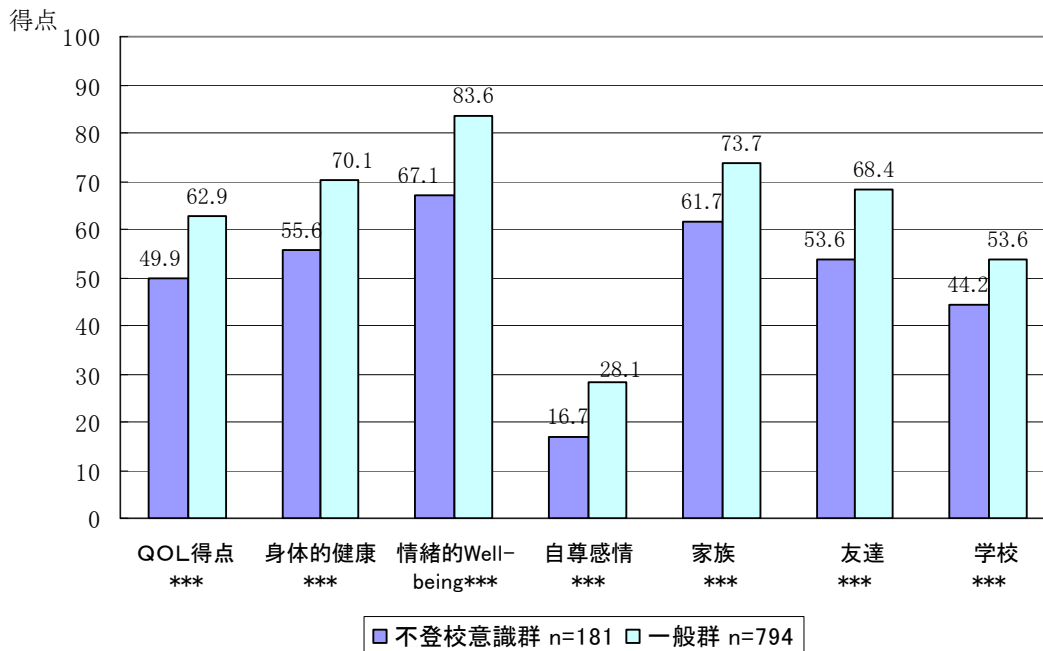


図 9-1-2 「不登校意識群」の QOL 得点と 6 領域得点の平均値（中 2）

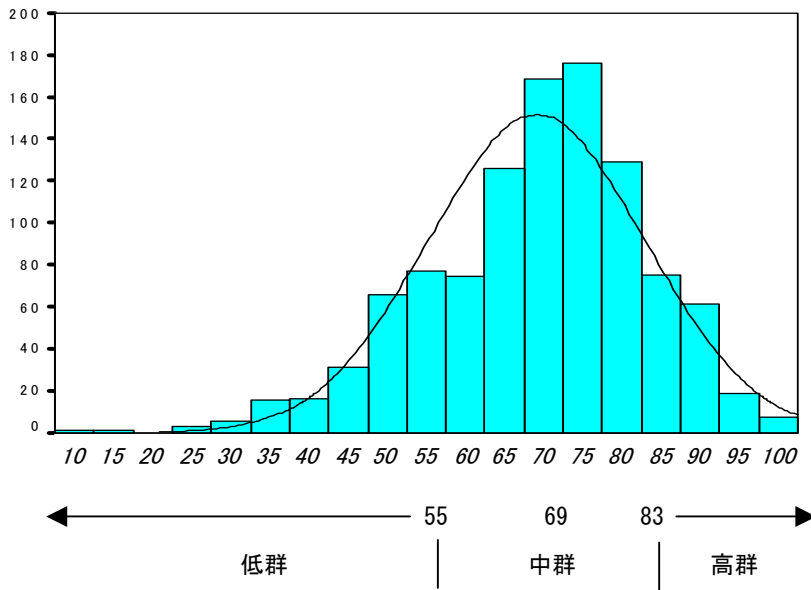


QOL の得点の分布において、「不登校意識群」はどのような位置にあるかをみるために、QOL の合計得点の平均値±1 標準偏差により、低群、中群、高群をつくった（表 2、図 9-1-3、図 9-1-4）。「QOL 得点低群」とは、心身の健康度・満足度が低い子どもたちの群であり、低群は、小 5 で 18%、中 2 で 15%となった。「不登校意識群」における QOL 得点のそれぞれの群の割合をみたのが、図 9-1-5 である。小 5 では、「不登校意識群」の 54%が「QOL 得点低群」であり、中 2 では「不登校意識群」の 38%が「QOL 得点低群」であり、「不登校意識群」の中に QOL 得点が平均値－1 標準偏差以上低い子どもが多くいることがわかる。

表 2 QOL 得点群

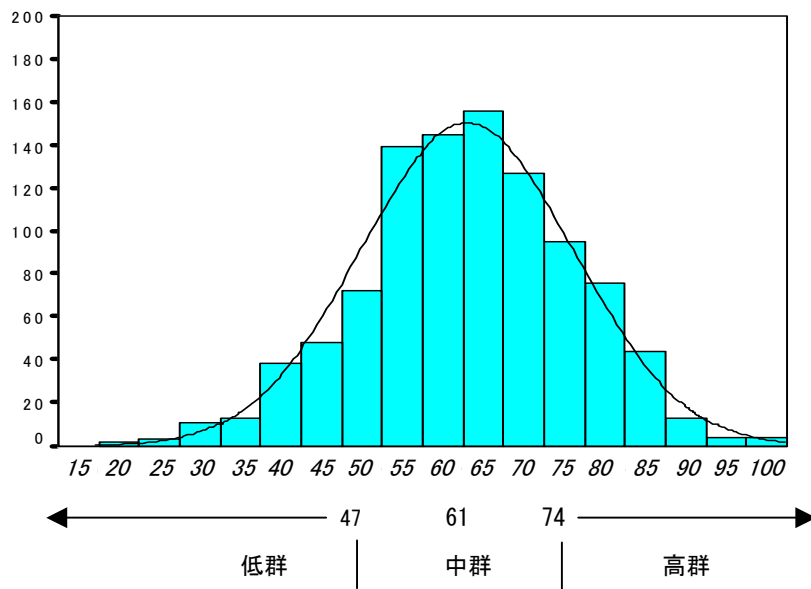
		平均値	標準偏差	低群	中群	高群
小5	得点	69.1	13.8	11.5～55.2	55.3～82.9	83.0～100
	実数(%)	1049(100.0)		186(17.7)	703(67.0)	160(15.3)
中2	得点	60.5	13.1	19.8～47.3	47.4～73.6	73.7～100
	実数(%)	990(100.0)		146(14.7)	678(68.5)	166(16.8)

図 9-1-3 小5のQOL得点の分布



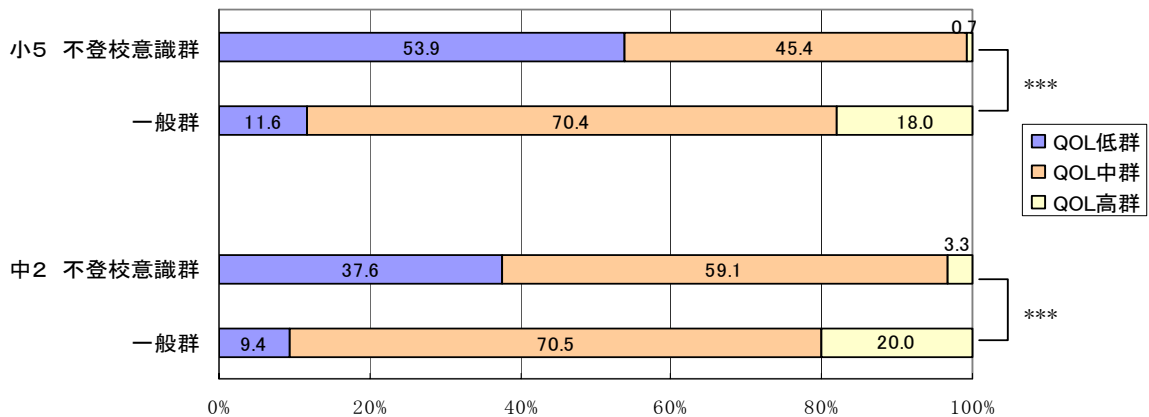
平均値 69.1
標準偏差 13.8

図 9-1-4 中2のQOL得点の分布



平均値 60.5
標準偏差 13.1

図 9-1-5 「不登校意識群」におけるQOL得点群の割合



(2) 不登校意識群のイライラや集中力

「不登校意識群」の精神状態をみるために、イライラや集中力に関する項目とクロス集計してみた。「イライラすること」は、「いつもだった」、「よくあった」を合わせると、小5、中2とも「不登校意識群」の5割ほどある。「だれかに怒りをぶつけたくなること」は、「いつもだった」、「よくあった」、「ときどきあった」を合わせると、小5、中2ともに「不登校意識群」の5割にのぼる(図9-2-1、図9-2-2)。

図9-2-1 「不登校意識群」と「イライラすること」の関連

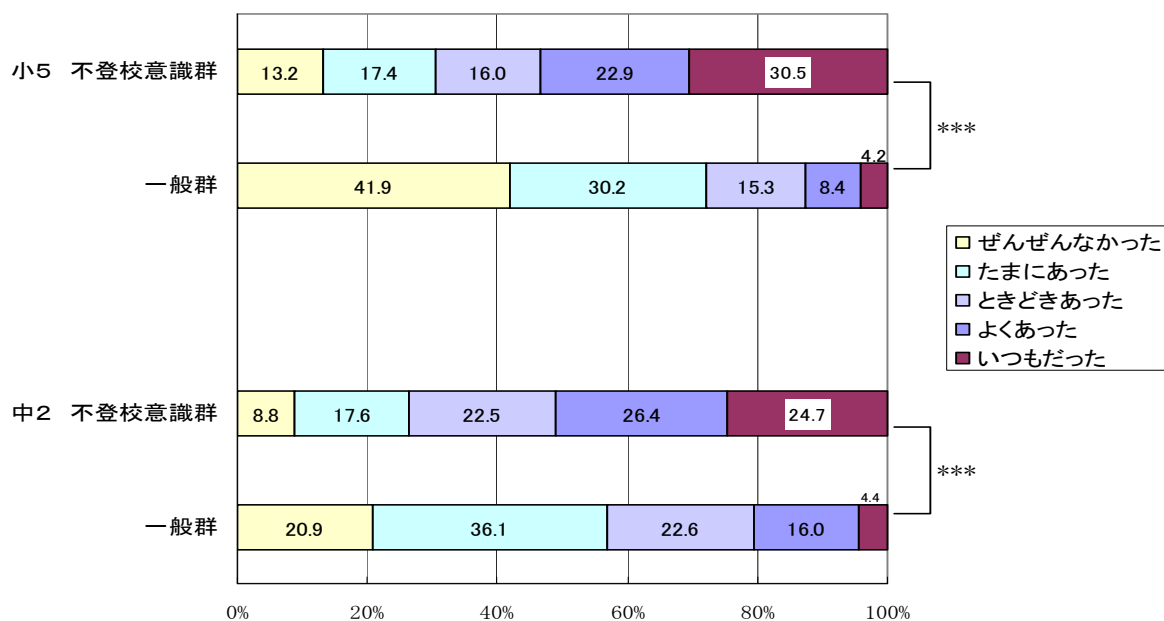
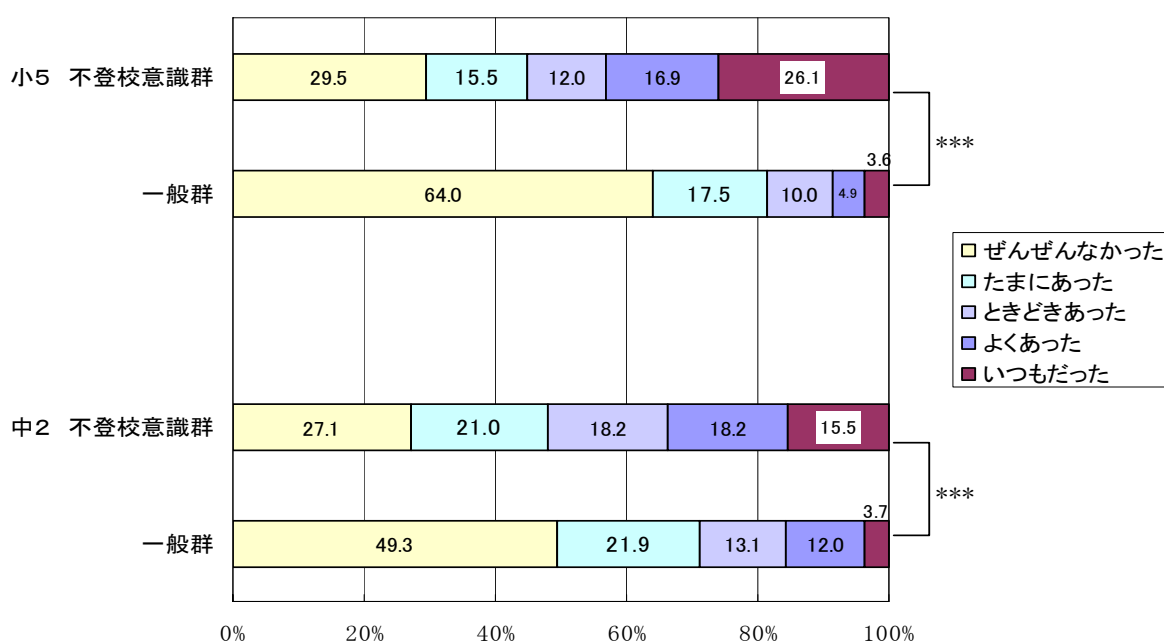


図9-2-2 「不登校意識群」と「だれかに怒りをぶつきたいと思ったこと」の関連



また、「何もやる気がしないこと」は、「いつもだった」、「よくあった」を合わせると、小5で「不登校意識群」の4割、中2の5割ある。「何かに集中できないこと」は、「いつもだった」、「よくあった」を合わせると、小5、中2とも「不登校意識群」の5割弱になっている(図9-2-3、図9-2-4)。このような、イライラや集中力のなさは、うつ傾向の状態であるともいわれており、「不登校意識群」の約5割は、そのような精神状態にあることがわかる。

図9-2-3 「不登校意識群」と「何もやる気がしないこと」の関連

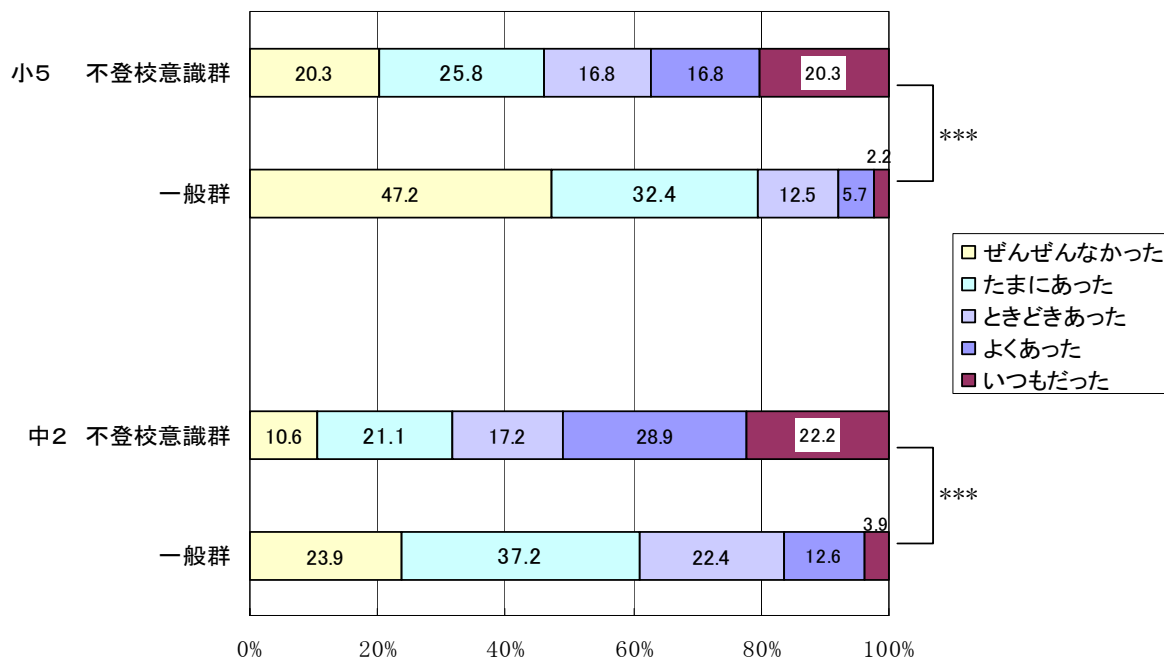
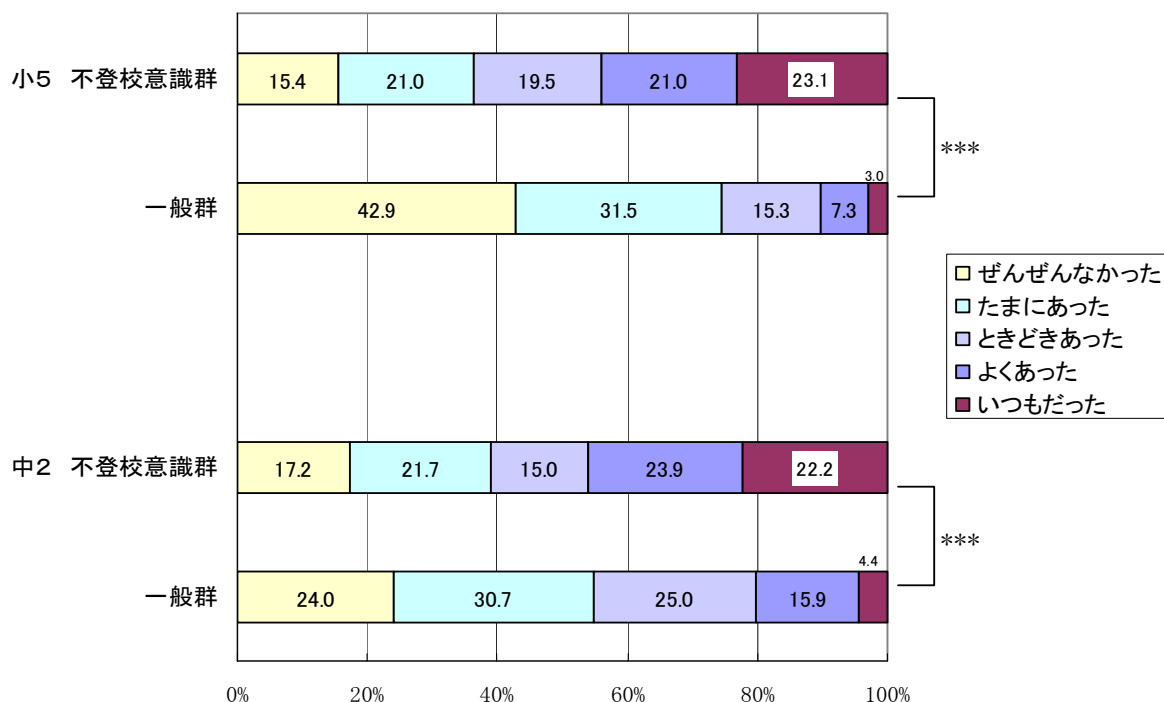


図9-2-4 「不登校意識群」と「何かに集中できないこと」の関連



(3) 不登校意識群と睡眠

「不登校意識群」と就寝時間の関係を見たのが、図 9-3-1、図 9-3-2 である。小5では11時半以降に寝ている子どもは、「一般群」では15%であるのに対して、「不登校意識群」では24%あった。中2では、12時半以降に寝ている子どもたちは、「一般群」では17%であるのに対して、「不登校意識群」では27%あった。

また、小5では「不登校意識群」の5割が、中2では7割強が「昼間に眠たかったこと」が「よくあった」、「いつもだった」と回答しており、「一般群」に比べて眠たい子どもの比率が高かった(図 9-3-3)。不登校意識のある子どもの中には、就寝時間が遅く、昼間に眠たい子どもが比較的多いということである。

図 9-3-1 不登校意識群と就寝時間 (小5)

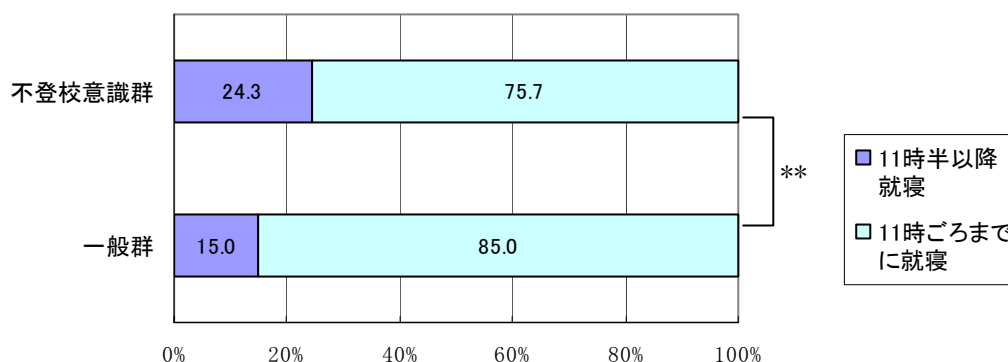


図 9-3-2 不登校意識群と就寝時間 (中2)

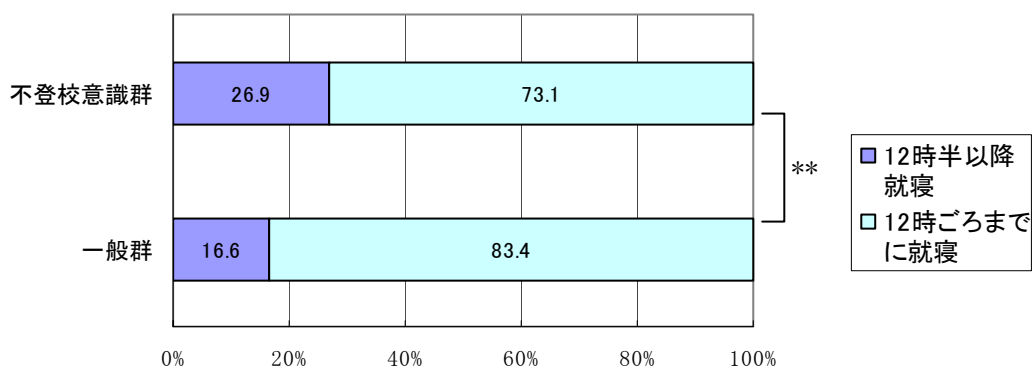
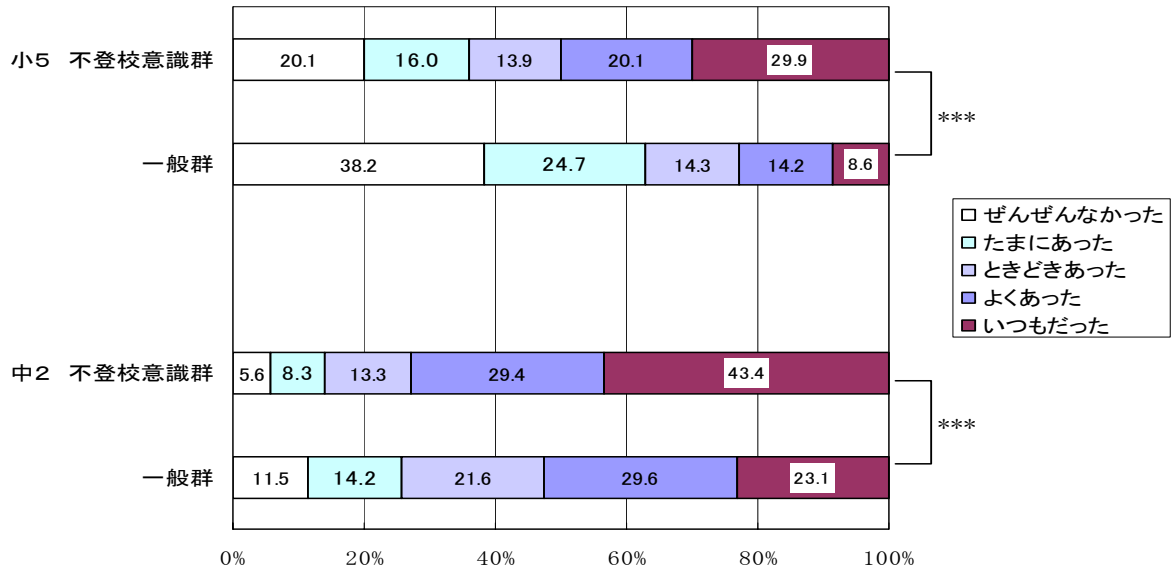


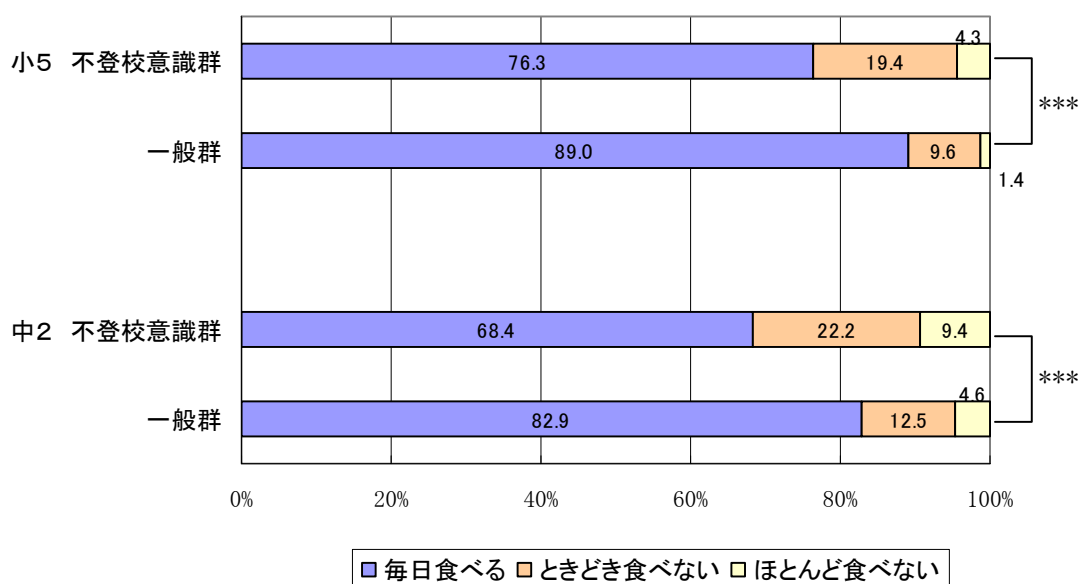
図 9-3-3 「不登校意識群」と「昼間に眠たかったこと」の関連



(4) 不登校意識群と朝食

「不登校意識群」と朝食の摂取との関連をみたのが、図 9-4-1 である。「不登校意識群」のうち、「ときどき食べない」、「ほとんど食べない」子どもたちは、小5で 24%、中2で 32% おり、「一般群」における比率より高くなっている。朝食を毎日食べない子どもの QOL 得点平均値は低いことを先にみたが、「不登校意識群」の子どもたちの中には、朝食を食べずに心身の健康状態がよくない子どもの比率が「一般群」より高いと考えられる。

図 9-4-1 不登校意識群と朝食の摂取



(5) 不登校意識群と家族関係

「家で嫌なことがある」と答えた子どもは、小5で「不登校意識群」の38%、中2で45%あり、その比率は「一般群」より高かった(図9-5-1)。家庭で感じている嫌なことの内容としては、「親が自分と遊んだり相手にしたりしてくれない」、「家族との会話が少ない」、「勉強しなさいとうるさく言われる」(小5のみ)、「親が厳しすぎる」、「親にたたかれたりする」、「親が自分の気持ちをわかってくれない」、「親がなんでもすぐに口出しをする」のすべてで、「不登校意識群」の方が「一般群」よりも「ある」の比率が高かった(図9-5-2～図9-5-8)。とくに、小5で「勉強しなさいとうるさく言われる」「親にたたかれたりする」「親が自分の気持ちをわかってくれない」の比率が高く、3割ほどあった。

図9-5-1 「不登校意識群」と「家で嫌なことがある」の関連

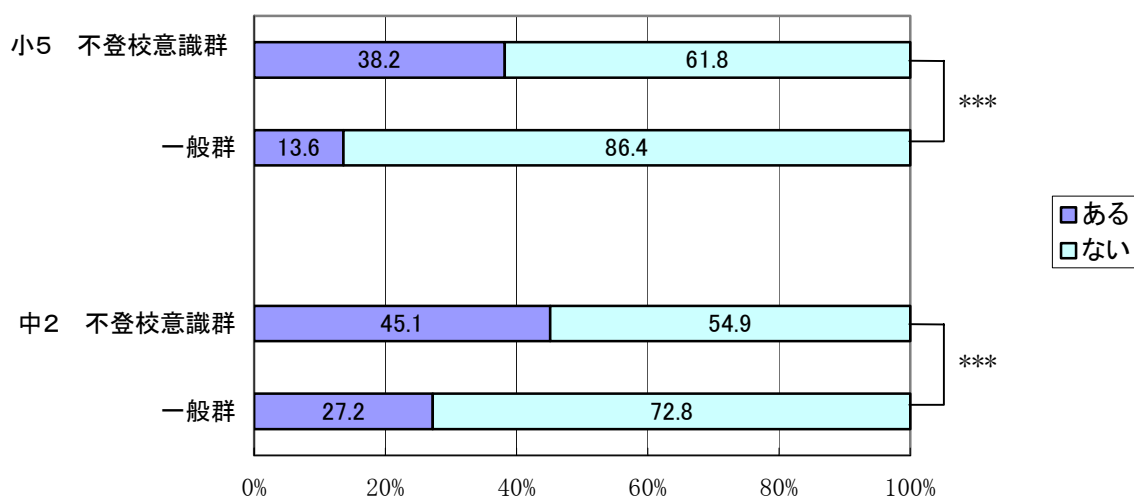


図9-5-2 「親が自分と遊んだり相手にしてくれない」の関連

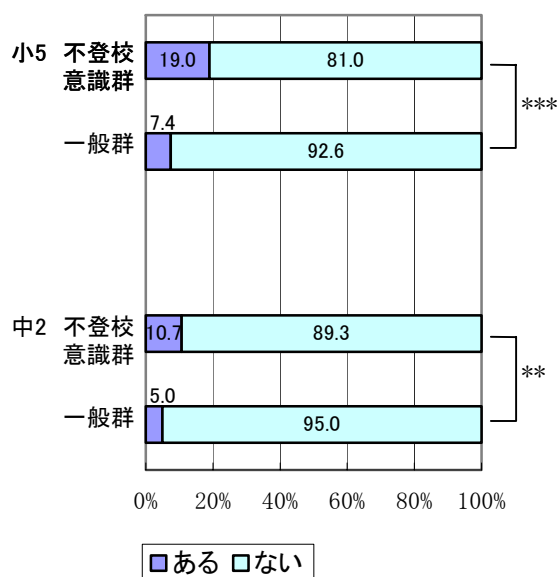


図9-5-3 「家族との会話が少ない」の関連

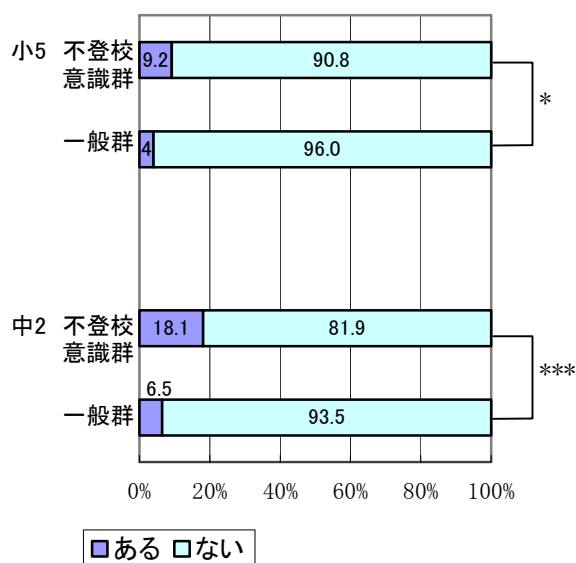


図 9-5-4 「勉強しなさいとうるさく言われる」との関連

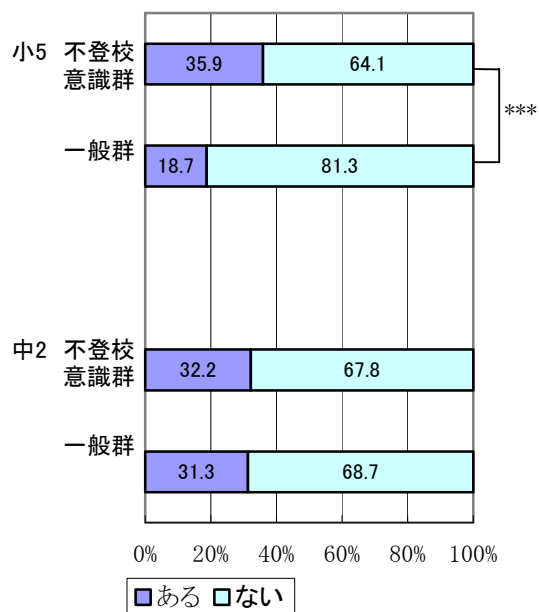


図 9-5-5 「親が厳しすぎる」との関連

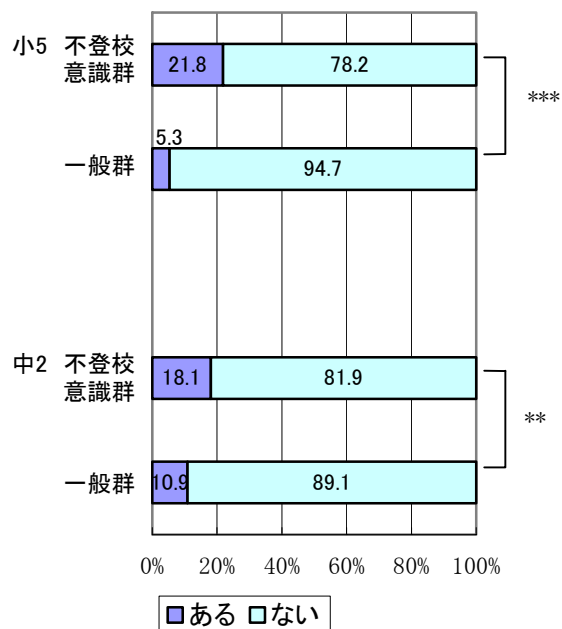


図 9-5-6 「親にたたかれたりする」との関連

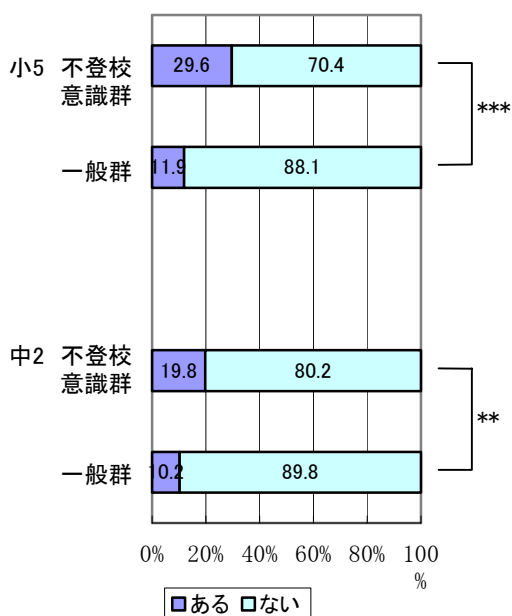


図 9-5-7 「親が自分の気持ちをわかってくれない」との関連

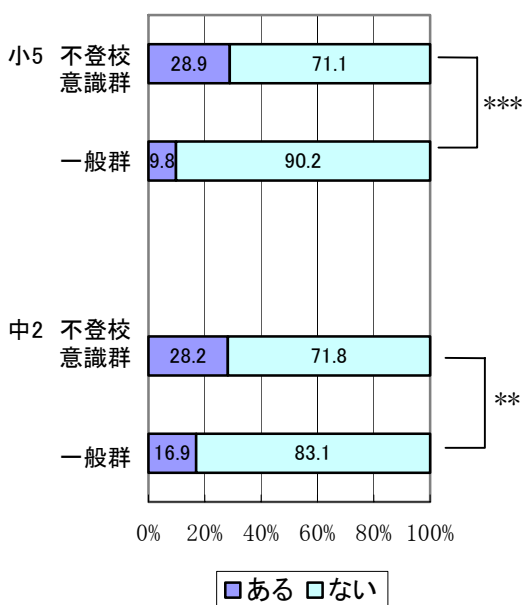
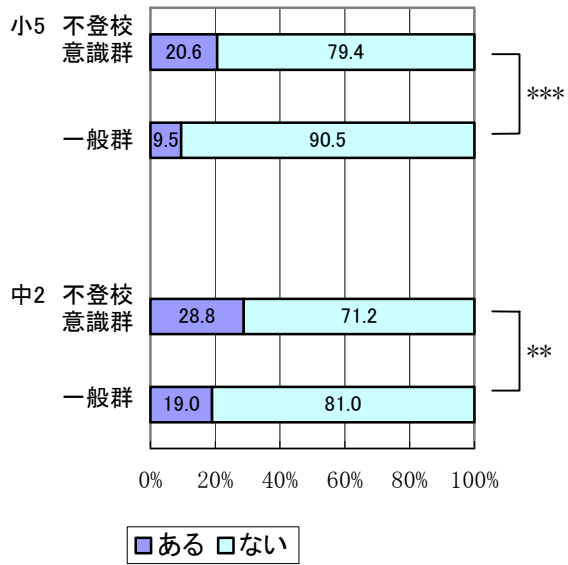
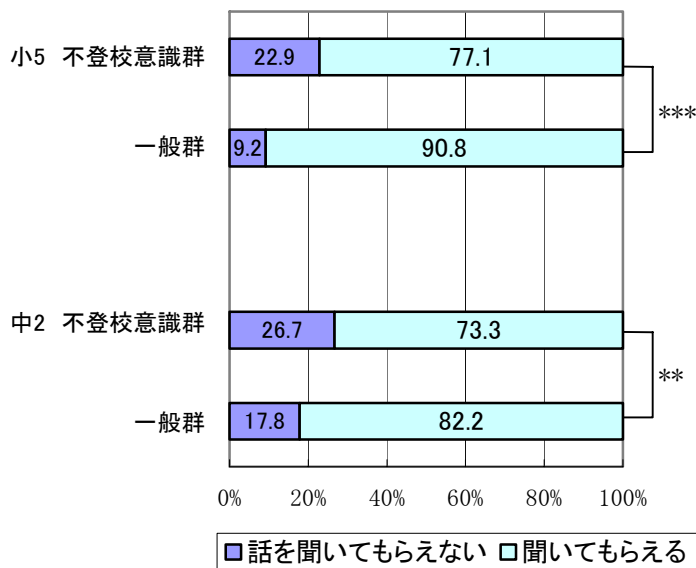


図 9-5-8 「親が何でもすぐに口出しをする」との関係



また、「父母に話を聞いてもらえるかどうか」では、「聞いてもらえない」（ぜんぜん、ほとんど、あまり、少し）子どもの割合が、小5で「不登校意識群」の23%、中2で27%あり、「一般群」より高かった（図 9-5-9）。すでにみたように、「話を聞いてもらえない群」は、心身の健康度・満足度（QOL 得点）が低かったが、「不登校意識群」が心身の健康度・満足度が低いのは、話をきいてもらえないこととも関連していると考えられる。

図 9-5-9 「不登校意識群」と「話を聞いてもらえない」の関係



(6) 不登校意識群と友達関係

「放課後や休日と一緒に遊ぶ友達」がいるかどうかについては、小5で「不登校意識群」の3割、中2で1割の子どもが「いない」と回答しており、「一般群」における割合より高かった(図9-6-1)。「不登校意識群」の中には、放課後や休日と一緒に遊ぶような友達がない子どもも比較的多くいるということである。

「友達とメールをする」子どもの割合は、「不登校意識群」も「一般群」も差がなかったが、「知らない人とメールをする」子どもは、小5で「不登校意識群」の5%、中2で18%と、「一般群」の倍以上になっている(図9-6-2、図9-6-3)。

図9-6-1 「不登校意識群」と「一緒に遊ぶ友達の有無」の関連

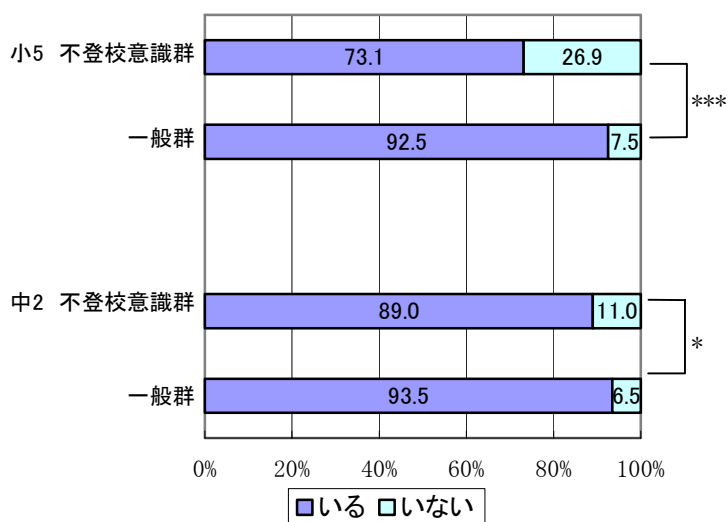


図 9-6-2 「不登校意識群」と「友達とメールをする」の関連

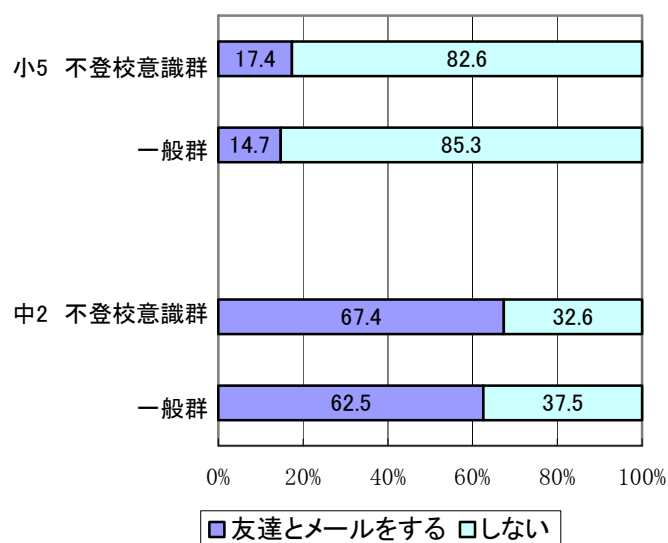
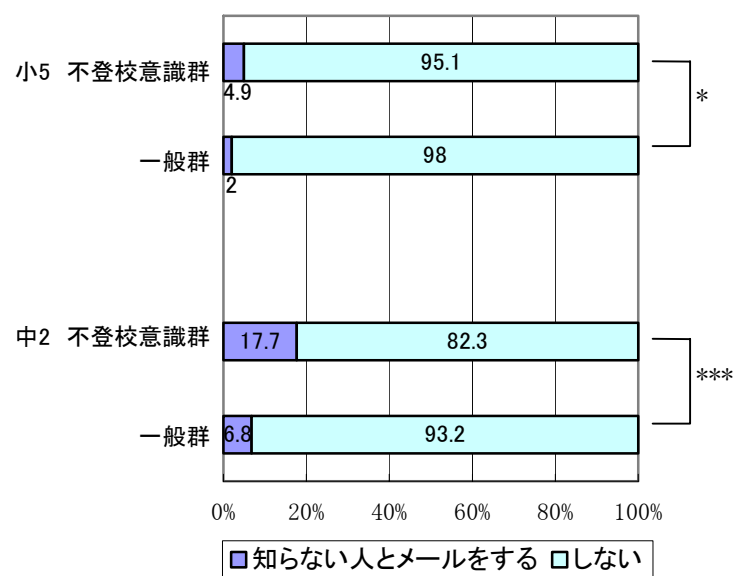


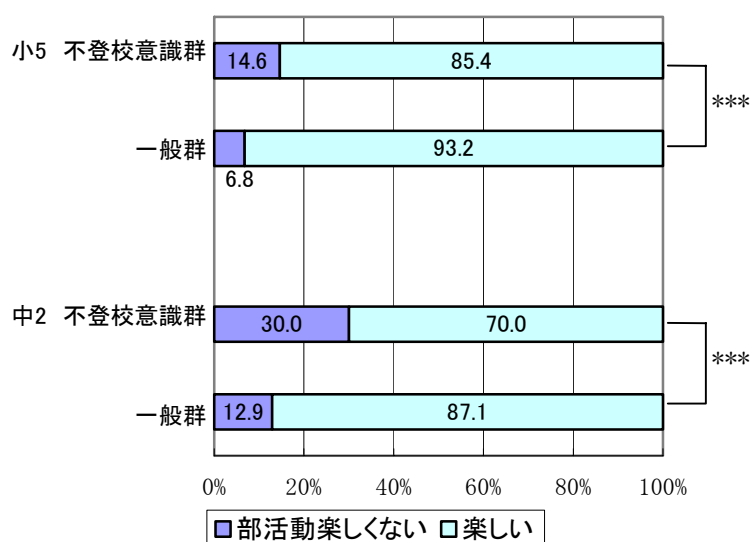
図 9-6-3 「不登校意識群」と「知らない人とメールをする」の関連



(7) 不登校意識群と部活動の楽しさ

「不登校意識群」と部活動の関係をみたのが、図 9-7-1 である。部活動が「楽しくない」（ぜんぜん、ほとんど、あまり）と回答した子どもの割合は、小5で「不登校意識群」の15%、中2で30%であり、「一般群」の倍ほどあった。「不登校意識群」の中には、部活動が楽しくないと感じている子どもも多くいる。すでに部活動と忙しさの関連をみたが、言い換えると、部活動が忙しくても、楽しければ、学校に行きたくないと思うことは少ないと考えられる。

図 9-7-1 「不登校意識群」と「部活動の楽しさ」の関連



(8) 不登校意識群と悩みの有無

悩み事や心配事があるかどうかでは、「ある」は、小5で「一般群」が4割であるのに対して「不登校意識群」では7割、中2では「一般群」が6割であるのに対して「不登校意識群」では8割であった(図9-8-1)。「不登校意識群」の中には、家で嫌なことがある子ども、父母に話を聞いてもらえない子ども、校外で一緒に遊ぶ友達がいない子ども、部活動が楽しくない子どもが比較的多くいたが、そのようなことと関連して、悩み事や心配事を抱えている子どもも多いと思われる。

また、「困ったことや悩み事を相談しない」と回答した子どもは、小5の「不登校意識群」には44%おり、「一般群」より高くなっている(図9-8-2)。

図9-8-1 「不登校意識群」と「悩み事や心配事の有無」の関連

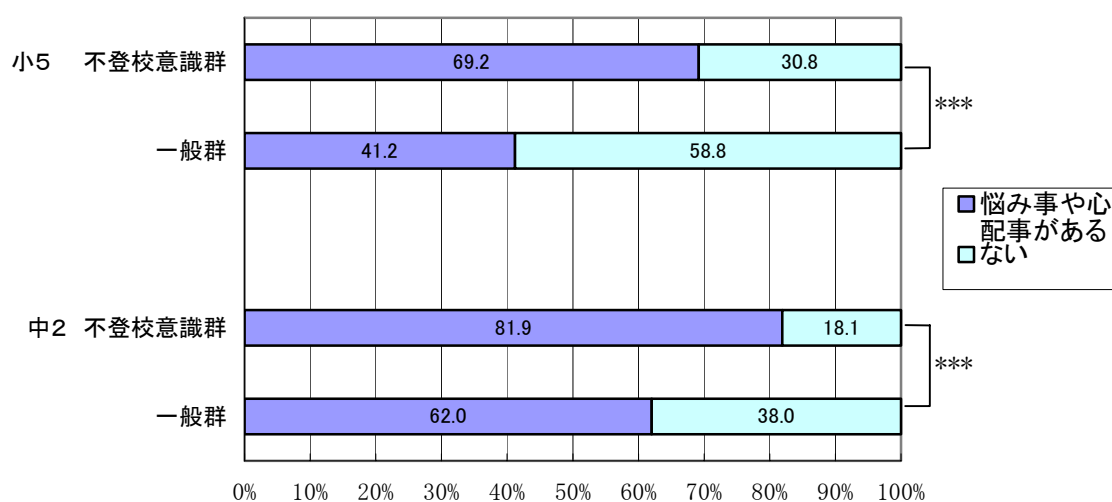
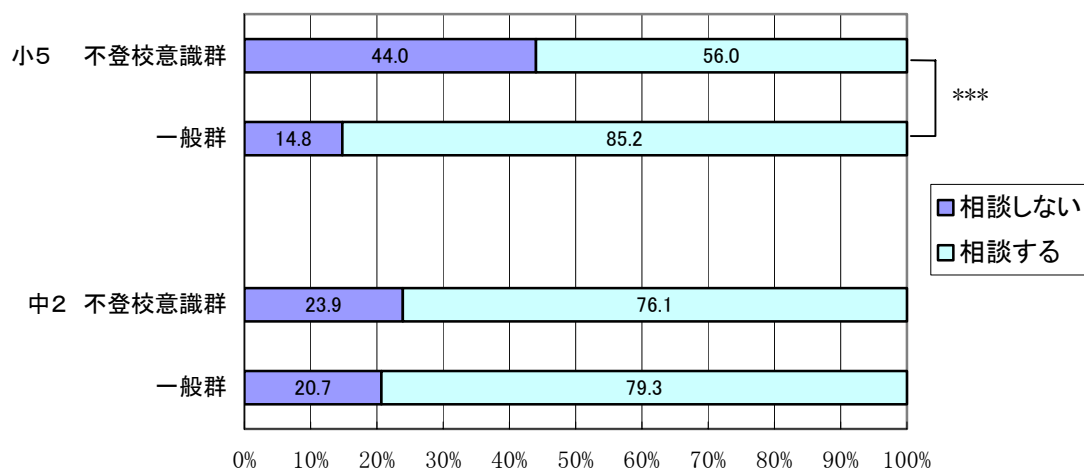


図9-8-2 「不登校意識群」と「困ったことや悩み事を相談しない」の関連(小5)



(9) 不登校意識群と将来への意識

「不登校意識群」は、将来の夢や職業等について、どのような意識をもっているのだろうか。

「夢やいきがいの実現可能性」との関連をみたのが、図 9-9-1 である。小5では、「不登校意識群」の方が「一般群」よりも、「夢やいきがいの実現可能性がない」（ぜんぜんない、ほとんどない、あまりない）と思っている子どもの割合が高かった。

「将来つきたい職業」についても、「不登校意識群」の方が「一般群」よりも、「実現可能性がない」と思っている子どもの割合が、小5で高かった（図 9-9-2）。「将来明るいと思うかどうか」については、小5、中2とも、「不登校意識群」の方が「一般群」よりも、「明るいと思わない」（ぜんぜん思わない、ほとんど思わない、あまり思わない）子どもの割合が高かった（図 9-9-3）。とくに「将来の明るさ」に関する意識では、「不登校意識群」と「一般群」との差が大きくなっている。

すでにみたように、夢やいきがいの実現可能性に関する意識、将来つきたい職業の実現可能性に関する意識、自分の将来の明るさに関する意識は、「父母に話を聞いてもらえない群」では低くなっており、「不登校意識群」には「話を聞いてもらえない」子どもが比較的多かったが、やはり「不登校意識群」は、自分の将来についても否定的な意識をもっている子どもの割合が高くなっている。また、悩みや心配事の内容としては、とくに中2では「勉強や進学のこと」、「将来の職業のこと」が多かったが、悩みや心配事を抱えている子どもが多い「不登校意識群」では、そのことが将来の意識にも影響しているのではないかと思われる。

図 9-9-1 「不登校意識群」と「夢やいきがいの実現可能性」の関連

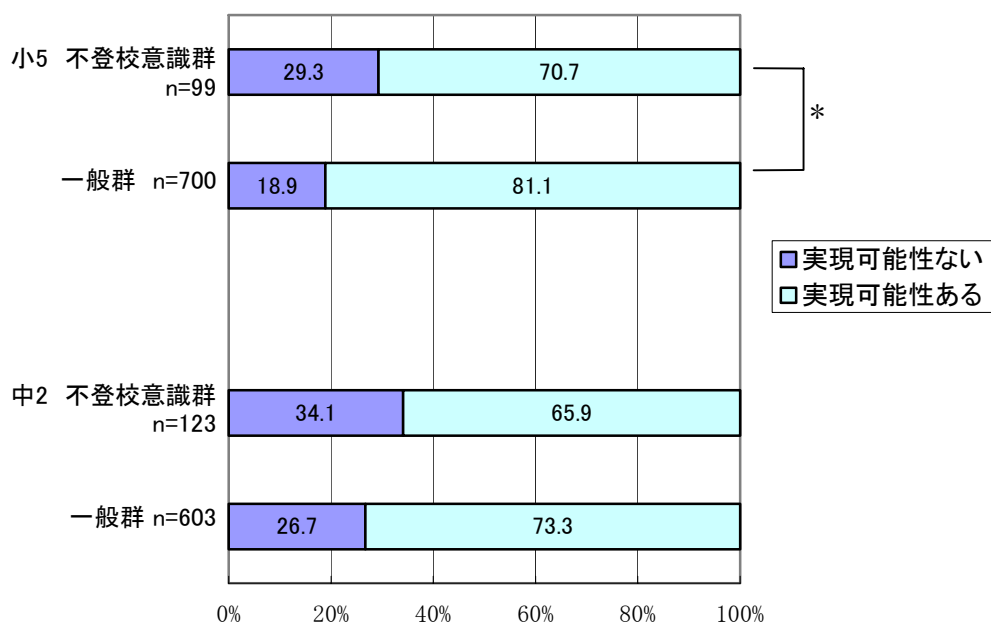


図 9-9-2 「不登校意識群」と「就業の実現可能性」の関連

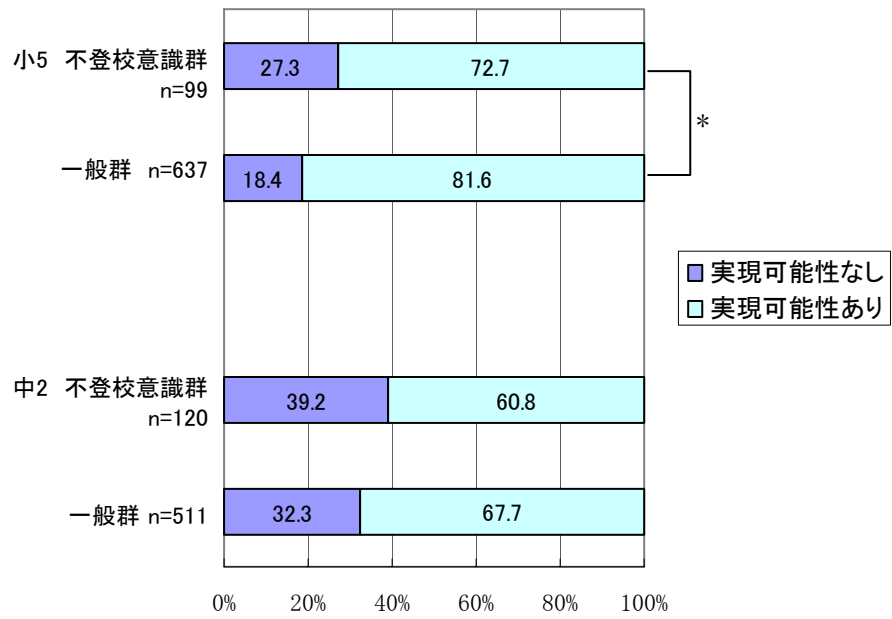
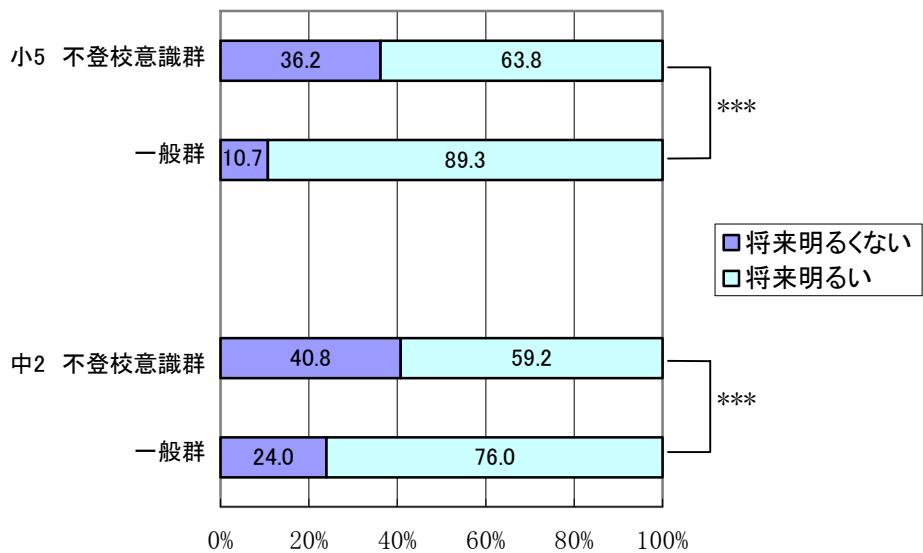


図 9-9-3 「不登校意識群」と「将来の明るさ」の関連



(10) 不登校意識群と地域との関係

「家族で付き合いのある近所の人や友達」がいるかどうかでは、小5で、「不登校意識群」の25%は「いない」と回答しており、その比率は「一般群」より高かった（図 9-10-1）。中2では差はみられなかった。すでにみたように、「家族で付き合いのある近所の人や友達」がいない子どもたちは、心身の健康度・満足度が低かったが、中2では不登校意識とは関連しないようである。

図 9-10-1 「不登校意識群」と「家族で付き合いのある近所の人」の有無の関連

